

今後の学校における キャリア教育の在り方について —PART 2 各論(①小学校編)—

収録日:平成23年12月15日



文部科学省 初等中等教育局
児童生徒課 生徒指導調査官
教育課程課 教科調査官



国立教育政策研究所 生徒指導研究センター 総括研究官

藤田 晃之

CAREER EDUCATION



平成21年3月



平成22年1月(改訂版23年5月)



平成23年11月

小学校はキャリア教育実践の宝庫



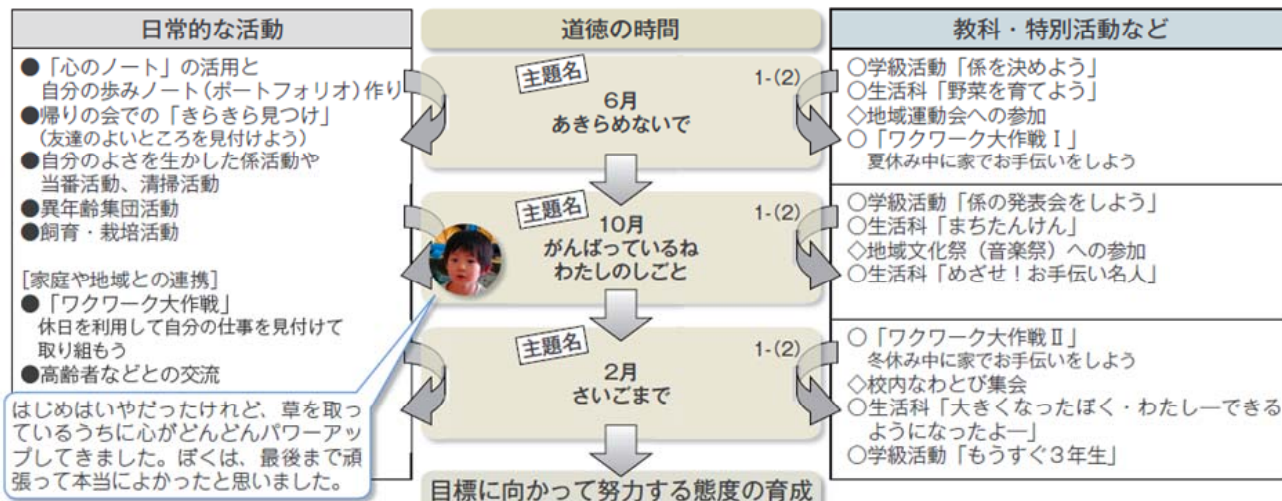
CAREER EDUCATION



例えば.....

展開例 ▶道徳の時間を要とした総合的な取組例(2年生)

ねらい ●自分がやらなければならない勉強や仕事は、しっかりと行う 1-(2)



ポイント

- 豊かな体験活動との関連を図りながら、体験を振り返ることができるようにします
- 各教科等との関連を図りながら、道徳の時間を積み重ねましょう

「キャリア教育は新しい教育活動ではない」と言われますが、これは「これまでどおりの教育でよい」ということですか？

文部科学省による『小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引』（平成 18 年）には、「キャリア教育は、必ずしも新しい教育内容を導入しようとするものではない」と記されていますが、それに続くように指摘されていることを見落としてはなりません。

(キャリア教育は) 教育活動の領域・単元の1つではなく、教育活動全体に働きかけていくという見方が大切です。小学校では、既存の教育活動のなかにキャリア教育と関連する内容が数多くあります。それらをキャリア教育の視点でとらえ直すことで、それぞれの活動の関連が明確になります。学級担任がすべての教科を見渡しやすいという小学校の利点を生かし、キャリア教育の視点を意識して取り組むことが大切です。

もちろん、学校や地域の特性、子どもたちの実情に応じて、新しい教育内容や活動を加え、キャリア教育をより豊かにする工夫もまた大切であることは言うまでもありません。けれども、まずは既存の教育活動をとらえ直し、その力を十分に生かすことが必要でしょう。

小学校・中学校・高等学校においては、児童生徒がそれぞれの発達段階のキャリア発達上の課題を達成することができるよう、PDCAサイクルを基に社会的・職業的自立に必要な基礎となる能力・態度の育成に教育活動がこころを配る。ここでは、それぞれの学校でキャリア教育に取り組むに当たって特に留意

小学校教育のあらゆる場面には、キャリア教育として活用できる多くの教育活動があります。だからと言って、「何してもキャリア教育」ということではありません。

全教員が、キャリア教育の視点をもって、それぞれの教育活動の中に育るキャリア教育の「苗汁」を含め、体系的・系統的なキャリア教育として展開する意図的な準備を共有しているのです。各教科や道徳、総合的な学習の時間、特別活動など、それぞれの特質を生かしながら、多様な機会を計画的に活用して展開していきます。

子どもたちによる力を身に付けさせるのを意識し置いて
取組のねらいや目標です。6年間という長期間にあたる小学校では、
特に、異年度の児童にたいして指導が求められます。例えば、

低学年 一人ひとりの好きなこと、得意なことや得意なことを増やし、
毎日の活動に意欲と自信を持って取り組めるように

中学年 一人一人のよさを認め、協力して活動する中で、自分の
持ち味や長所が自覚できるように

高学年 苦手なことや初めて挑戦することへ失敗を恐れずに
取り組み、そのことが集団の中での有用な役割や自覚
感情につながるように

校内組織を整え、PDCAサイクルを確立しながら、目指す姿
と結果を評価し、改善を図っています。

学校間の連携を活性化しよう

職業体験活動、高等学校での職業体験活動（インターンシップ）の連携がないまま系統性、発展性を欠いた職業活動、侵入事業所などにとっては負担感が募る活動となる機会・場の限定、児童生徒の学習・活動の回数等も十分に足りていない。

「何をしてでもキャリア教育」という意識から脱却しよう

小学校教育のあらゆる場面には、キャリア教育として活用できる多くの教育活動があります。だからと言って、「何をしてもキャリア教育」ということではありません。

全教員が、キャリア教育の視点をもって、それぞれの教育活動の中にあるキャリア教育の「断片」をつなぎ、体系的・系統的な教育活動として実現させる意識的な取組を共有したいものです。各教科や道徳、総合的な学習の時間、特別活動など、それぞれの特質を生かしながら、多様な機会を計画的に活用して展開していきましょう。

- 専攻・専修科目の選択と工夫
- 志望校及び進路、新卒者への学習の時間、特別活動とのつながり
- 職場体験の入り方の工夫（日数、回数、休職失学の連携）
- 校内の指導体制「勉強の充実」（学年交替からの脱却）
- 関係諸機関（行政、NPO等）との連携
- 体験活動の評価の工夫
- 地域・保護者の教育力の活用（連携、協力の推進）

専門学科においては、実習、調査研究やインターンシップが、生徒の心・身・意を通じた一連のキャリア教育の集大成となる。したがって、専門学科に共通教育の機会を拡大し、生徒の能力を多面的に伸ばし、共に目指していくという組織作りが重要となる。

総合学科においては、小・中・高を通じた一連のキャリア教育の機会を多くとって学習状況が可視化できると考えている。将来の職業選択を基盤に入れたものの進路への自覚を深めつつ、自らに最もふさわしい科目等を選択していくことで、生徒を育成する。また、大学別の経験や能力を評価し、ゼミ、サークル、





やみくもにがんばらない

(『中学校キャリア教育の手引き』からのヒント)



- キャリア教育実践の機会となり得る単元や教育活動を詳細に見出す作業(いわゆる「洗い出し」の作業)と、教科を通したキャリア教育の年間指導計画の作成との混同を避けることは重要である。
- 例えば、キャリア教育を通して育成する「基礎的・汎用的能力」の一つである「課題対応能力」には、情報を正しく理解するための能力が含まれるが、この力を育成する機会となり得る単元等は教科を問わず数多い。「国語」における「読むこと」では、本や文章などから必要な情報を集め目的に応じた情報を読み取る力の育成は主要課題の一つであるし、「社会」の「地理的分野」における地域に関する情報の収集や処理、「理科」における観察や実験の過程での情報の検索や処理などもその具体例となろう。また、授業中に板書された課題文を正しく読み取ることなどまでを視野におさめれば、情報を正しく理解するための能力の育成に寄与し得る教育活動は、文字通り無数にある。(続く)



やみくもにがんばらない

(『中学校キャリア教育の手引き』からのヒント)



- キャリア教育の実践の機会となり得る単元や教育活動を広く見出し、それを列挙することは、教科を通したキャリア教育の年間指導計画の作成にとって有効な基礎作業の一つであるが、このような作業によって挙げられた膨大な数の単元等を、例えば一覧表形式に整理したとしても、それをそのまま指導計画として見なすことができない。なぜなら、その一覧は、キャリア教育の実践の機会として活用し得る可能性が高い場の羅列に過ぎず、キャリア教育の一環としての教育意図に基づく指導実践の計画にはなっていないからである。
- このような「洗い出し」の作業によって列挙された単元等のうち、学校ごとに設定したキャリア教育の目標や他の教科等との関連性を勘案しながら、社会的・職業的自立に向けその基盤となる能力や態度を育てるためのキャリア教育の一環として、どこに焦点を当てようとしているかを検討し、教育意図に基づいて実践する具体的な単元等を特定していくことが、体系的・系統的な指導にとって不可欠である。それぞれの生徒に学びの意義を認識させるにあたり、自らの将来との関係を特に意識させることが授業のねらいを実現する上でも効果的に働く単元等を見いだし、授業を改善するきっかけとしてキャリア教育の視点を生かすことが求められている。(p.70)

1

単元一覧表（小学校５年）と基礎的・汎用的能力との関連の検討作業過程の一例

「今」「この学年・この学級」の
子どもたちのために必要なことを

誤解

小学校からのキャリア教育は 早すぎるのではないか？